得します、又夫婦の財産關係に於ても婚姻の取消あるまでは法律上の效力を有しますから、夫婦相互の間に於きましては其爲したる夫婦財産契約は取消までは依然其效果を生じ、夫婦の財産關係は總べてこの契約に依つて定まります。

短歌　眞宮起雲

哲學大學にありし弟不治の病を得十一月十三日大學病院にありて身まかりければ

はらからの冷たき駭さすりては冥府のかなたに思ひ馳せ泣く

黄泉なる臺に父と語るらむやせたる兄のさだめうすきを

あゝなどて息あるうちに一度の笑まひをこそと唯泣かれぬる

老いませし母をのこして冥府に行く汝が歌永久に我を泣かしむ

弟の骨を抱きて歸るさの夜滊車のこまど月ひやゝかき

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

新年の歌（〆切十二月十五日）

投稿所　伊勢白子局區内　みどり短歌會

撰評者眞宮氏にさはることありて、今回は應募の和歌を載すること能はず、何れ次回に掲載すべし、次の課題は右の如し、心ある人の奮つて投咏あらんことを望む　記者

フレーベル會俳句端書集

一、課題　當季雜吟一人十句以下

一、締切　毎月二十五日限り

一、披露　翌々月本紙上

一、賞品　三光には景品を呈す

一、撰者　當分本會の撰とす
一、投稿　本誌購讀者は何人にても投吟する事を得用紙は繪葉書に限り（眞筆刷物隨意）住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村
フレーベル會俳句掛
鹽野奇零宛

第十七回俳句端書集

馬喰の馬買に行く小春かな　大分春月　同
維摩忌や關白の鹵簿寺に入る　同
空寒し賤が小家の根深汁　同
炭燒の小五郎孝の譽れあり　同
庭もやゝ青葉に交る紅葉哉　長野曉靈　同
刈りし田の門に淋しき案山子哉　同
黑き塀白き土藏や夕紅葉　同
稻の香を牛に積みたる小春かな　仙台一瓢
松葉搔く唄の透るや小春風　同
茶袋を吊す垣根や歸り花　同
戸にさわる赤城颪や葱深汁　同
秋雨や馱馬に鞭打つ曖道　本郷區　ゆかり子
落中や月に磯の千萬家　同
足跡に沙漁潛みけり忘れ汐　同
早乙女も老ひけり小田の落水　同
何となく物の淋しき后の月　神戸學洋
高殿に人聲もなし後の月　同
目にあまる谷間〳〵や龍田姫　同
朝寒や障子にひゃく臼の音　同
寒月や矢矧の橋に人の聲　埼玉白醉樓
寒月や峠にかゝる武者一人　同
月寒し小犬五六匹軒の下　同
寒月や野中の地藏歩み出し　同
寒月や谷に水汲む御僧あり　同
月寒し森に怪しき鳥の聲　同
寒月に仰いで笑ふ狂女かな　同
寒月や横町に立つ人の影　東京春綾
榾の火に爺の出しけり古表紙　同
木枯や夕日かゝりて啼かぬ鳥　栃木さだ子
唐黍に落つる日早し秋の暮　同
木枯や大星小星砥ぎ出して　甲洲泉岳
會席に酢の香も立ちて小六月　大坂きよ女
冬の月水も光りて流れけり　靜岡樂水
物老し不二の姿や霜の朝　信州耕村
酒さめて舟に厂聞く雨夜なか　浦和吸月

遠く見ゆる烟突凄し冬の月　同
僧一人味噌たく寺や初時雨　近江古杉
夢に見た人に逢ひたる十夜哉　同
道絶えて狐の穴や枯野原　遠州愛水
鳴く千鳥雨を寒かる泊り客　下總梅泉

三光

天、襟巻に首を縮めて網代守　川越閑人
地、初時雨峠半ばに日の暮る　東京春綾
人、砧聞て襟元寒き夜船かな　神戸學洋

追加

去年今年さぞな戰地の冬籠り　無一庵奇零
霜の夜や細き野道を小提灯
永き夜の碁客聲なし石の音
日參や鎮守の庭の霜柱
榾の火や麓の家の疎らにて
雲散りて石切る音や散る紅葉
寺に行く瘦せた姿や茶の頭巾

五十

桑港のわびずまひ（つゞき）

敏子

それよりその日の定まれることをなして十二時を迎へ、マダムに手傳ひてガスの火にての料理、朝と同じやうなことをして二時まで働くのでございます。この間に本を習ひ、質問をし、手も耳も口も忙はしい。二時には主婦はハイスクールにゆき、主人は馬車を驅りて遊びにゆくのは常のやうになつてゐます。五時まではわがグードタイム、公園にそゞろあるきしやうと、友人を訪問しやうと勝手なのでありますが、留主居をして、來客に挨拶し、電話をうけなどすると、御機嫌甚だよろしいのでありますから、近頃は外出せず、ケッチン大王となりて、勉強したり、手紙書いたり、花園のそゞろあるきして歌でも口すさんだりして居